
集まれ！リュミレース学園！

あしゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

集まれ！リユミレース学園！

【Nコード】

N9068Y

【作者名】

あしゆき

【あらすじ】

数々の伝説が組合わさってできた世界『ウルベリン』、そこには三つ大陸と無数の学園がある。その一つ『リユミレース学園』に一人の少年が信念と覚悟を持って仲間と一緒に人生を楽しむ！バトルあり！ギャグあり！シリアスあり！？恋愛もありな何でもありの学園ストーリー！

『集まれ！リユミレース学園！』 始まります！

注意！作者はテイルズシリーズを一部しかしてません、よって出てこない作品やキャラがいると思いますので注意してください。ま

た、
一部のキャラが変態化します。重ねてご注意ください

プロローグ（前書き）

はじめましての方ははじめまして、そうでない方は私だ！あしゆきと申します

この度は六作目を書かせていただきます

ただし、あくまでこれは息抜きなので更新はかなり遅いと思います。
お気をつけください

それではどうぞ

武器の描写を変えました

プロローグ

人はそれぞれ内に信念を持ち、それを糧にして歩んでいる——by
アリマスト・バゼエル

――

青い空、白い雲、広がる壮大な大地と海。そして人と魔物

この世界、『ウルベリン』は人と自然、魔物と自然が共存している
世界

ある大陸には天まで届く塔が建ち、ある大陸には預言が存在し、あ
る大陸には特殊な宝石が存在する

そんな世界で生きるためにウルベリンには必要なことを学ぶ学園が
多数存在する

ここ『リュミレース学園』もその一つ、リュミレース学園は覚悟と
信念、そして正義を学び、社会の礎になるために作られた学園

その学園に通う少年が一人、その手には青のブレスレットと二丁の銃。髪は全体的に暗く、されど紅く燃えている

容姿は正に美少年と呼ばれるのに相応しい

その身に制服を纏い、彼は歩み続ける、己が信念と覚悟、そして正義を貫くために

「ふーむ……迷った。どうすっかなー……」

……道のりは険しいようだが

プロローグ（後書き）

次は主人公の友人が出てきます

皆さんの知ってるあんなキャラからこんなキャラまで！

それではまた次回

一の巻き（前書き）

一話目です！今回は説明が多いので気を付けてください

あと一言、どうしてこうなった

それではどうぞ

一の巻き

小鳥が鳴き、鶏が叫ぶ。太陽は半分ほど顔を出し、俺の顔を照らす

「ん、んう……ハア、朝か」

俺は起き上がりまだ上手く回らない頭で着替える、まだ適当だが後で手直そう。現在の時刻は7時半、準備には持ってこいの時間だとその時

コンコンとノックが静かな部屋に響く

『アジスー、起きてる〜?』

「起きてるよ、シャスティル姉」

ガチャと音をたてて赤髪のポニーテール美人が入ってくる、彼女は俺を見て驚く

「本当だ、珍しいわね」

「なんだよ、俺だってたまには自分で起きるさ」

「いつもは起こしてもらってるのによく言っわ」

ぐ、否定できない…彼女は俺の顔を見てクスクスと笑う

「ほら、朝食はもう作ってあるから。さっさとおりてきなさい」

「マジ？もしかしてシャスティル姉の朝食？しゃっ！」

俺は思わず嬉しくてガッツポーズをする、それを見て彼女は少し呆れた顔をする

「まったく、たかが朝食でそこまで喜ばなくていいのに」

「何言っただよ！シャスティル姉の飯だろ、喜ばないわけないだろ！？」

そ、そう…と彼女顔を染めて微笑む。その時

『シャスティル、お腹減ったー！』

下のリビングから声が響く、彼女は呆れた顔でため息をつく

「ハア…ハイハイ。今行くわよ！それじゃ早くね」

そう言っただけで彼女は部屋を出て下へ降りていく。今の時刻は7時45分、早く行って飯食おうと。俺は鞆に教科書を詰め込んで朝食が待つリビングへ降りていった

俺”アジス・アイヒープ”の朝はこうしてはじまる

――

「遅いわよアジス！私はもうお腹がぺこぺこなのよ！」

リビングに着くとシャスティル姉と瓜二つだが、どこか違う美人が足をバタバタさせていた。その様子がたまらなく可愛らしい

「ハイハイ。悪かったってヒスイ姉。おわびに俺の目玉焼きやるから」

なら許す！と満面の笑みで言ったのは”ヒスイ・アイヒープ”俺の二人目の姉だ。するとキッチンからエプロンをつけた俺の一人目の姉”シャスティル・アイヒープ”がエプロンを外して席につく

「まったく、アジス、あんまり甘やかさないでよ？」

「思わずあげてしまうほど可愛いヒスイ姉が悪い」

そう言うヒスイ姉はなっ！と声をあげ、シャスティル姉はムスツとする

「ば、バカッ！早く食べるわよ！」

「？何怒ってんだよ？ってイタタタッ！シャスティル姉！痛いって！」

「鈍感なアジスが悪い」

鈍感って何がだよ！俺は思ったことを言っただけだ、何が悪い！しかしそう言ったら間違いないボコられるので言わない

「ハア……憂鬱だ」

――

「ごちそうさま、相変わらず上手かったよシャスティル姉」

「そう、よかった」

そう言うとシャスティル姉は綺麗な顔で微笑む。ぐ、惚れてまうやろー！

「む、ほら行くよシャスティル！今日はお互い日直でしょ！」

「クスクス、そうね。それじゃねアジス、いつてきます」

いい忘れてたが、二人は双子だ。俺の一つ上でもある。双子なので見分けるのは他人には難しいが、生まれた時から一緒にいる俺にとっては見分けるなど容易いことである

他の皆は胸の大きさを判断するらしいが、女性を胸で判断するのは最低だと思う。因みに大きい方がシャスティル姉、そうでないのがヒスイ姉である

「いつてらー」

鞆を持って玄関に向かう二人に俺はヒラヒラと手を振ってその場に出迎えをする

ガチャンという音をたてて玄関のドアが閉まる。俺は飲み物を飲みながら新聞を見る

『帝国の姫、脱走』か…何考えてたんだか……姫様は大人しくチョコンと座ってりゃあいいのに……もしかしてかなりアグレッシブなのか？

ふと時計を見る、時刻は8時を回ったところ。そろそろかな？

ピンポンと家のチャイムが鳴る、もちろん我が家のだ

何だ、いつもより少し早いな…まあいつか

俺は鞆を持って玄関に向かい、ドアを開ける

「…おっす、ソディア。おはようさん」

「フン…」

こ、こいつは……！相変わらず可愛くない奴だ！

こいつは”ソディア”、少し前ひょんなことから俺の登下校と一緒にするようになった『生徒騎士団』の一人である

『生徒騎士団』とは、学園の行事を仕切ったり、学園の風紀奴らを退治し強制する。そして学園に襲ってくる魔物の退治、生徒の希望した物資の運搬等々。皆の頼れる便利屋のようなものだ。簡単に言えば生徒会だ

ソディアもその一人、基本騎士団には学校で好成绩を納めたり、クエストで功績を挙げる等の無理難題をしなければいけないのだが。俺の後輩だが一ヶ月という短い期間で騎士団に加入した、いうなれば『若きエース』『期待の新星』『天才』挙げればキリがない

とは言っても、学年別なのだが

「ったく、お前もご苦労様だな。こんな朝はやくにさ」

「フン、お前のためじゃない。私は」

「ハイハイ、『聖青騎士団』の団長様のためだろ？」

騎士団は学年ごとにその名前が違う、一年は『力緑騎士団』、二年は『聖青騎士団』、三年は『洸紅騎士団』

ソディアが憧れているのは『聖青騎士団』の団長”フレン・シーフオ”、俺の幼馴染みでもある

当然、騎士団の団長を勤めるぐらいだからもの凄く強い。この前は一人でガットウーゾを倒したとか言ってたな

おまけに頭もいいしルックスもいい、さらに性格はギャルゲー主人公ときたもんだ。言うまでもないが、かなりモテる。バレンタインにチョコの入った袋に囲まれた時のアイツの顔、俺には殴ってくださいと言ってるように見えたね、うん

「ハア、んじゃ行きますか。愛しのフレン様に会いに」

「なっ、わ、私が好きなのはフレン様ではなくて……！」

「ハイハイ。ほら行くぞー」

のろけ話など聞きたくない、俺はソディアの返事を聞かずに歩き出した

「あ………フン！………鈍感」

ソディアは何かを呟いた後、不機嫌そうに俺の後ろを着いてくる

ハア………まったく、何でドイツもコイツも怒ってんだよ？わけ分かんねえ………

俺は疑問に思いながらも学園へと登校した

突然だが、『生徒騎士団』の話の続きをしようと思う。先程も言った通り『生徒騎士団』に入るには才能と努力が必要となる、それを踏まえて騎士団に入った者はその学園の憧れの的となる

実はこの騎士団、それも目的の一つだったりする

でだ、話は戻るが憧れの的となる騎士団は学年全体に顔を知られている。だが俺は普通の一般生徒、顔なんてクラスメイトにしか知られていない。そんな俺が騎士団と一緒に歩けばどうなる？ 答えは簡単

「……」

もの凄く睨まれる、男女関係なく。ソディアは馴れているのか普通に歩いてるが、何度も言うが俺は一般生徒である。そんなものに耐性などついている筈もなく

もの凄くビクビクしながら進むしかない

「男ならもう少しシャキつとしろ。情けない」

「…俺はお前の神経疑うよ」

そんなことを言いながら下駄箱まで着く、ソディアは一年なのでここからは別々となる。因みに俺は二年だ

とりあえず、上履き履くか

階段を上り、教室まで歩く。すると

「うわぁ！」

「うわぁ!?!」

ギツと後ろを振り向くと、長髪の男が笑っていた

「つてめ、またかユーリ！」

「ようアジス、おはようさん」

スルーすんな！コイツは俺の幼馴染みの”ユーリ・ローウェル”俺が所属する『2-C』のクラス最強でもある

見た目もよく人当たりも悪くないので結構人気が高い。ケツ、リア充が！

「何しやがる！」

「いや、付き合いが長い親友に朝の挨拶をと思ってな」

「……………本音は？」

「ただからかいたかっただけ」

「殺す！」

俺はユーリに殴りかかるがユーリはそれをヒョイッと避ける、チツ、
やっぱ当たらないか

「ハア…どうして俺の周りにはこう強者しかいないのかねえ……………」

「……………人のこと言えないと思うがな」

は？なんじゃそりや？

「……………自覚なし、か」

こりゃ重症だな。と言いながらユーリは先に歩く。おい待て！置いてくなユーリ！

ここは『リュミレース学園』今日も今日とて生徒達は楽しく暮らす

一の巻き（後書き）

そういえば、ソディアってWikipediaだと女なんだよな

けどニコ動では男と言ってる……どういつことだってばよ？

それではまた次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068y/>

集まれ！リュミレース学園！

2011年11月28日01時52分発行